

プロジェクト研究所 業績報告書（最終報告）

【研究プロジェクトの名称】

アート・コミュニケーション プロジェクト

【研究所の名称】

実践女子大学 アート・コミュニケーション研究所

【研究所員】

研究所所長	文学部	美学美術史学科	教授	椎原伸博
副所長	文学部	美学美術史学科	准教授	下山 肇
研究員	生活科学部	生活環境学科	教授	高田典夫
	文学部	美学美術史学科	専任講師	織田涼子
	文学部	国文学科	助教	坂口 周
（平成 26 年 4 月 1 日～9 月 30 日）				
文学部	博物館学課程		非常勤講師	椎原晶子
（NPO 法人たいとう歴史都市研究会 副理事長）				
文学部	美学美術史学科		非常勤講師	工藤安代
（NPO 法人アート&サイエンス研究センター 代表理事）				
文学部	美学美術史学科		非常勤講師	神野真吾
（千葉大学教育学部准教授）				
文学部	美学美術史学科		非常勤講師	宮崎刀史紀
（財団法人神奈川芸術文化財団）（平成 26 年 4 月 1 日～9 月 30 日）				
人間社会学部			助手	宮原一郎（平成 27 年度）
文学部	美学美術史学科		非常勤講師	杉浦幹男（平成 28 年度）

【設置期間】

2014 年 4 月 1 日 ～ 2018 年 3 月 31 日

【研究課題（テーマ）】

「アートを通じたコミュニケーション教育の可能性に関する研究」

文部科学省は平成 22 年より、国際化の進展を背景にして「多様な価値観を持つ人々と協力、協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成すること」が重要であると、そのためには子供たちのコミュニケーション能力の育成が大事であるとして、「コミュニケーション教育推進会議」を設置した。そして、平成 23 年 8 月にその審議経過が報告された。その報告において、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」とされ、「①自分とは異なる他者を認識し、理解す

様式 15-1

ること ②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること ③集団を形成し、他者との協働、協働が図られる活動を行うこと ④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと」などの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要があるとされた。

本研究は、コミュニケーション教育の場において、アートのような創造的な活動をどのように活用するべきかについて研究する。そのためには、美術だけでなく、映画や音楽、文学といった創造的な分野を、他者に伝える手法と、それにより他者がどのように動機づけられていくかを観察する必要がある。本研究は、そのために、研究員、学生、そして渋谷校地近隣の文化施設との協働作業により、ワークショップ形式で検証作業を行う。

【研究概要】

本研究は、研究員の実地調査を中心とする《研究調査》と、研究成果を公にするためのシンポジウム、レクチャーなどの《シンポジウム事業》、学生参加の《ワークショップ事業》を軸に行った。以下、年度毎の研究概要を提示する。

2014年度

《シンポジウム事業》

①平成 26 年 6 月 7 日 東京国立近代美術館講堂

芸術学関連学会連合第 9 回公開シンポジウムを共催「藝術の腐葉土としてのダークサイド」

②平成 26 年 11 月 29 日 実践女子大学日野キャンパス香雪記念館大教室

日本アートマネジメント学会とシンポジウムを共催

「文化芸術振興における大学の役割」

《ワークショップ事業》

①平成 26 年 12 月 13 日（土）・14 日（日）

実践女子大学渋谷キャンパス 創立 120 周年記念館 1 階 プレゼンテーションルーム

「シブヤのスキマを見つけよう -あなただけの渋谷を発見-

講師：宮腰まみこ氏（フォトグラファー）

②平成 27 年 2 月 21 日 実践女子大学渋谷キャンパス 創立 120 周年記念館

10 階 スカイラウンジ

公開キャリアワークショップ「アートの現場で働くということ」

2015年度

《研究調査》

① NPO 法人 BEPPU PROJECT 関連事業の調査

② 中之条ビエンナーレの調査

③ アーツ前橋調査

④ 文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」と静岡県の文化政策事業の調査

⑤ 水戸芸術館「田中巧起 共にいることの可能性、その悩み」展調査

《ワークショップ事業》

「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」

NPO 法人芸術資源開発機構(通称: ARDA)の協力を仰ぎ、三ツ木紀英氏を講師に迎え、対話型鑑賞ファシリテーター養成講座を開いた。三ツ木氏は、フリーランスやNPOの立場で、美術施設だけでなく街や施設の中で展覧会・アートワークショップのコーディネーションを行っている方であり、ニューヨーク近代美術館の元教育部長フィリップ・ヤノウィンから一年にわたり、Visual Thinking Strategies(以下 VTS)を学び、近年は対話による美術鑑賞のファシリテーター育成することで、社会とアートの接点を開拓している。

この講座の目的は、対話を通してビジュアル・アートを読み解く手法を学び、ファシリテーターとして実践する活動を通して、学生のコミュニケーション能力の向上を目指すことにある。ファシリテーターとして学ぶことは、主体的に場をつくる力や、話し手の言いたいことを深く理解し、整理して話をまとめる協調性やコミュニケーション力が育成されるので、本研究の達成目標そったものであった。

この講座は学内で全学生向けに告知して、当初は募集人数を15名のところ、16名の応募があった。全学的に受け入れる予定ではあったが、告知のタイミングや学生の関心度に原因し、受講者は美学美術史学科学生と大学院美術史学専攻の学生で構成されることになった。その内訳は、大学院2名(M1とM2それぞれ1名)と、学部は4年1名、3年10名、2年1名、1年2名であった。今回の講座では三ツ木氏と共に、ARDAのスタッフ近藤乃梨子氏が講師に加わり、2チーム体制で講座を運営した。

講座は夏期休業中の8月21日(金)に開講し、その後8月26日(水)を基礎編とし、秋 Semester 開始以降は演習編として土曜日(10月31日、11月21日、12月12日、12月19日、1月31日)に講座を開き、実際の美術館における研修に備えた。その後、東京都美術館で開催される「都美セレクション新鋭美術家 2016」にて研修することに決まり、3月2日(水)に下見(作品選定、ルート確認等)をして、3月8日(火)に実地研修を行った。

2016年度

《研究調査》

- ① 静岡県の文化政策調査 ふじのくに世界演劇祭2016
- ② 静岡県の文化政策調査
- ③ 岡山芸術交流と奈良町芸術祭 はならあとの調査
- ④ 新視野芸術節 New Vision Art Festival2016 の調査
- ⑤ 瀬戸内国際芸術祭 2016 および香川県美術施設など視察
- ⑥ あいちトリエンナーレの調査
- ⑦ 金沢創造都市政策調査
- ⑧ 宇都宮市、水戸市の美術館調査

これらの調査から、地域を舞台とするアートプロジェクト、あるいは地域アートと呼ばれている運動の現状を確認した。工藤研究員は、そういった場では「社会に関与する芸術」と

様式 15-1

いう新しい価値が生じていることを検証し、自らが主宰している NPO で大規模な展覧会「ソーシャリーエンゲイジドアート展 社会を動かすアートの新潮流」を開いた。この傾向を神野研究員は、社会の芸術フォーラムの運営を通じて、再検討を加えて『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社）にまとめ出版した。また、椎原所長は日本アートマネジメント学会全国大会にて、地域アートの問題について「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について」という発表を行った。

《シンポジウム事業》

トークセッション「政治とアート～アートはだれのもの？」

日時：2017年1月27日（金）18：10～20：40

場所：実践女子大学創立120周年記念館 603教室

登壇者

モデレーター

宮原一郎（実践女子大学人間社会学部助手）

基調講演

榎野展正（アウトサイド・キュレーター、クシノテラス主宰）

プレゼンター

花房太一（S-HOUSE Museum アートディレクター、アートコメンテーター）

奥平聡（アーティスト、コンサルタント）

太田エマ（キュレーター、あなたの公-差-転）

コメンテーター

松下慶太（実践女子大学人間社会学部人間社会学科准教授）

武居利史（府中市美術館学芸員）

宮原研究員はかつて沖縄の那覇市にあったアートスペース「前島アートセンター」の運営に関わっており、その時の経験をいかして、このトークセッションを企画した。このトークセッションは、アウトサイダーアートへの関心の高さもあり、学外からの聴講者を集めることが出来た。

2017年度

《研究調査》

- ① 静岡県の文化政策調査 ふじのくに世界演劇祭2017
- ② 芸術学関連学会連合シンポジウム
- ③ 山口情報芸術センターの調査
- ④ リボン・アートフェスティバルの調査（宮城県石巻市、牡鹿半島地域）
- ⑤ 奥能登国際芸術祭の調査（石川県珠洲市）
- ⑥ 井原市平櫛田中美術館 鞆の浦の調査（岡山県井原市、広島県福山市）
- ⑦ いわき市野外展と水戸美術館の調査
- ⑧ 静岡芸術劇場の調査

様式 15-1

調査は、2016 年度に引き続き地域アート、アートプロジェクトに関する調査を集中的に行った。

《シンポジウム事業》

公開レクチャーシリーズ

① 2018 年 1 月 10 日

西川千春 「オリンピックボランティア：大会の顔」

② 2018 年 1 月 20 日

森 弘治 グローバリズムとローカリティのはざままで ～現代アートの視点から～

③ 2018 年 2 月 24 日

星野 太 「『関係性の美学』とは何だったのか？20 年後の『関係性の美学』」

全て、公開レクチャーとして行い、生涯学習の機会を提供した

【研究実績（研究員の活動実績含む）】

2014 年度

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成 26 年度事業報告書」を作成した。報告書には、共催で行った二つのシンポジウム「芸術の腐葉土としてのダークサイド」「文化芸術振興における大学の役割」のうち、後者についてはテープ起こしして、報告書に記載した。それ以外の研究成果としては、神野真吾研究員は本務校の千葉大学で遂行中の WiCAN の活動と、当研究所の研究が深くリンクしており、「場とコミュニケーション - アートで変わる、アートも変わる -」等の報告会で、研究成果の発表を行った。また、工藤安代研究員は、美学美術史学科紀要 29 号に論文「ソーシャル・エンゲージド・アートの現在 - 社会的文脈に関わる近年のアート活動の動向」を発表した。

学生の教育及び支援に関する還元としては、美術系ワークショップ「シブヤのスキマを見つけよう～あなただけの渋谷を発見～」と、キャリア支援型のワークショップ「アートの現場で働くということ」を行った。前者は、プロの写真家が都市を見つめる視線と、学生の視線との差異を明らかにして、ものの見方を学ぶものであった。後者は、アートの仕事には様々な可能性があり、そのために今必要な事について考察する機会を学生に与えた。

2015 年度

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成 27 年度事業報告書」を作成した。報告書には実地調査の報告と、「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」の報告を行った。後者は事業概要、具体的な実施講座受講生による基礎編と演習編の講座内容説明、実地研修の概略、受講生の感想文を提示すると共に、事業総括を行った。

それ以外の研究成果としては、神野真吾研究員は研究成果を「社会の芸術フォーラム共同代表」「千葉 アートネットワーク・プロジェクト代表」等の活動に活かした。椎原晶子研究員は、アサヒ・アート・フェスティバル 2015 に参加した「でんちゅう Days～Live Arts and Archives」などの活動に活かし。下山肇、織田涼子研究員は、自身の実技制作等に研究成果を還元している。所長の椎原は日本アートマネジメント学会の研究誌や学会で研究成果の

様式 15-1

還元を行った。

「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」では、最終的に東京都美術館にて実地ワークショップを開催し、14名の学生が現場で対話型鑑賞ファシリテーターを体験した。参加学生の感想文をみると、約半年の訓練で自身のコミュニケーション能力の向上を実感しており、教育的効果は高かった。

2016年度

研究成果については、「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 平成28年度事業報告書」を作成した。報告書には、実地調査の報告と、トークセッション「政治とアート～アートはだれのもの？」の報告を行った。代表椎原は、日本アートマネジメント学会にて「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について」という発表をした。それ以外の研究成果としては、神野研究員は研究成果を「社会の芸術フォーラム共同代表」「千葉アートネットワーク・プロジェクト代表」等の活動に活かし、『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社）にまとめ出版した。椎原晶子研究員は、「東京文化資源会議」などの活動に活かし。工藤研究員は「社会に關与する芸術」に関する大規模な展覧会を開催し、その啓蒙活動につとめた。下山肇、織田涼子研究員は、自身の実技制作等に研究成果を還元している。

2017年度

研究成果については、4年間の研究成果を総括する「実践女子学園アート・コミュニケーション研究所 研究成果報告書」を作成した。報告書には、2014～16年度のシンポジウム記録と、2017年度行った公開レクチャーの報告を行った。この報告書には、以下三本の論文を掲載した。

- ① 椎原伸博 「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について
- ② 神野真吾 アート・プロジェクトとは何か～可塑的、偶然の創造を許容できるか～
- ③ 工藤安代 アート・プロジェクト2010年代

下山肇、織田涼子研究員は、自身の実技制作等に研究成果を還元した。

【研究活動における成果】

1. 雑誌、学会発表、図書等

〈2014年度〉

工藤安代「ソーシャリー・エンゲイジド・アートの現在：社会的文脈に関わる近年のアート活動の動向」『実践女子大学美術史学』29号、39-47頁、2015年3月・

工藤安代（翻訳）パブロ・エルゲラ著『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント』フィルムアート社

椎原晶子（共著）「サブリースによる伝統家屋活用の可能性について：都市部の伝統家屋活用における中間組織の役割 その1(空き家活用, 建築社会システム, 2014年度日本建築学会大会(近畿)学術講演会・建築デザイン発表会)」『学術講演梗概集 2014(建築社会システム)』一般社団法人日本建築学会、363-364頁。

様式 15-1

〈2015 年度〉

椎原伸博「大震災モニュメントと記憶：アルベルト・ブッリ《クレット(亀裂)》を巡って」
『地域政策研究』高崎経済大学地域政策学会、18 巻 1 号、59-78 頁。

神野真吾 (共著)「アートや体験型の活動を通じて育まれうる「持続可能な社会のための想像・表現コンピテンシー」を捉える尺度の検討」『美術教育学：美術科教育学会誌』37 号、1-11 頁。

下山肇「角のセロシヤ(上賀茂・千年アート展, C 作品発表, いとおしき-歴史環境と芸術の未来-, 環境芸術学会第 16 回大会)」『環境芸術』15.1(0), 52 頁。

下山肇 (共著)「神戸ビエンナーレでの一連の PioRyo 作品について：個人では出来ない表現を目指して(A 口頭発表, いとおしき-歴史環境と芸術の未来-, 環境芸術学会第 16 回大会)」
『環境芸術』15.1(0)17 頁。

〈2016 年度〉

神野真吾 (共著)『社会の芸術/芸術という社会-社会とアートの関係、その再創造に向けて』
フィルムアート社

工藤安代「ソーシャリーエンゲイジドアート展 社会を動かすアートの新潮流」展の企画運営、3331 Arts Chiyoda 2017. 2. 18-2017. 3. 5

〈2017 年度〉

椎原伸博「「地域アート論」以降の「アートプロジェクト」論について」『地域政策研究』
高崎経済大学地域政策学、20 巻 2 号、81-93 頁。(研究成果報告書に再録 4-10 頁)

神野真吾「アート・プロジェクトとは何か〜可塑的、偶然の創造を許容できるか〜」本研究成果報告書、11-14 頁

神野真吾「美術教育と美術/アート」『美術教育ハンドブック』三元社

工藤安代「アート・プロジェクト 2010 年代」本研究成果報告書 13-17 頁

椎原晶子「都市住宅プロジェクトへの視点(17-1)空き家活用プロジェクト(第 1 回)まちにあかりを：家の記憶を引き継ぐ再生：谷中・上野桜木から」『都市住宅学』都市住宅学会 97 号、90-92 頁。

2. 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

2015~2017 年度に行った研究調査の成果は、各研究員の本学の授業において、調査結果を内容に取り込むことで学生の教育に還元した。

ワークショップ事業のうち、2014 年度のキャリアワークショップ「アートの現場で働くということ」は学生に多様な働き方を開示することが出来たので、高評であった。次に 2015 年度に行った「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」は、参加学生の意識向上が特に顕著であった。終了後に東京都美術館や東京都庭園美術館などのボランティアスタッフに参加する学生もおり、達成度が高かった。

シンポジウム事業においては、2016 年度「政治とアート〜アートはだれのもの?」は、美術館などで制度化されているアートとは異なるサブカルチャー的視点や、アウトサイダ

ーアートなどの社会包摂的視点が強かったため、学生に新しい視野を開かせることが出来た。また、2017年度の西川千春氏による「オリンピックボランティア：大会の顔」は、深澤晶久教授の取り組みと関連づけることにより、本学が推進する「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会連携事業」への意識を高めることが出来た。西川氏に関しては、2018年度にも、公開講座等でのレクチャーが予定されており、公開レクチャーに参加出来なかった多くの学生にも意識向上の機会が与えられることになるだろう。森 弘治氏の「グローバルズムとローカリティのはざままで ～現代アートの視点から～」は、学生に国際的な視点の必要性を提示し、星野 太氏の「関係性の美学」とは何だったのか？20年後の『関係性の美学』は、芸術の新しい価値概念を提示することで、多様な価値観の必要性を提示することが出来た。

【研究内容の今後について】

4年間の研究において力をいれたのは、新しい芸術の価値創造について検討を加えることであった。具体的には、現在日本全国で展開しているアートプロジェクトや地域アートでは、アーティストの一方通行的な創造性だけでなく、鑑賞者としての市民が、それに創造的に応答することで新しい芸術的な価値創造の試みが多くなされている。そこに参画するためには、アートを一つのコミュニケーションツールとして位置づけ、そこに自己のアイデンティティを反映する一方、他者にたいする包容力、理解力を身につけ、創造的なコミュニケーションを求める力が必要になるだろう。

現在東京にはさまざまな展覧会が開かれ、多くの観客を集めている。そういう展覧会で美しい作品に出会い、それらを鑑賞することで人間の感性は豊かになるだろう。しかし、それらは芸術的な価値を資本主義経済的に消費しているのも事実である。既に制度化されている芸術の価値そのものについて、ただ受容するのではなく、一度その価値そのものについて再考することも必要である。そして、その再考から、制度化された芸術的な価値とは異なる、新たな芸術的価値の可能性について考察することが求められているだろう。

そしてその考察は、自己だけでなく、他者との対話、コミュニケーションの場で行うことが求められている。新たな芸術的価値は他者から一方的に提示されるものでなく、いわば民主主義的な討論のなかから醸成されるべきであり、その問題意識は芸術が「公共性」に依拠していることを明らかにするだろう。また「公共性」の問題意識は、文化政策やアートマネジメントの根本原則でもある。

本研究はとりあえず本年度で終了するが、今後2020年のオリンピック・パラリンピックで行われるであろう、様々な文化プログラムの計画を考えると、各研究員は各自で本研究を継続することになるだろう。というのも、多くの公共的予算が投入され、様々な文化プログラムが構想されることが予想できるが、各研究員は芸術の新しい価値創造を前提とした文化プログラムに対する提言を行う立場にあるからである。また、本学の学生を中心とするオリンピック・パラリンピック関連事業においても、当然この研究視点は継続すべきであり、今後は本研究の成果を反映させていきたい。また、科学研究費等の学外研究費の獲得も視野

に、その研究成果を広く社会に発信することを目指したい。

【総括（所感・達成度）】

研究初年である 2014 年度は、予算執行の仕方等で戸惑いがあり思い通りに研究を遂行することは困難であった。そのため他の団体との共催という形でシンポジウムを二つ行った。そのうち、11 月に行った「文化芸術振興における大学の役割」は、日野キャンパスで行い、日野で展開中の「日野プロジェクト」の成果を披露するものであった。日野プロジェクトは、本研究と別枠ではあるが下山副所長、高田研究員が深く関わっているものであり、大学の地域連携の方向性を示せたと思う。また、ワークショップは手探り状態であったが、キャリア系のワークショップでは学生の反応が高く有益であった。

研究 2 年目の 2015 年度は、企画した「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」の受講学生の満足度が高く、研究の達成度は高かった。また、実地調査は地域社会における高齢化、空き家、人口流出といった問題に直面するものや、障害者などの社会的弱者における芸術の可能性に関するものを中心とすることで、芸術の社会包摂に関する問題意識を高め、各研究員の研究の達成度は高まった。しかし、当初の予定にあった渋谷地域の様々な組織との連携や、産学協同事業の提案は依然として困難な状況であった。この課題については、担当研究員の負担が大きいこともあり、最終的にも達成することが出来なかった。

研究 3 年目の 2016 年度は、研究調査によって、全国の地域を舞台とするアートプロジェクト、あるいは地域アートの現状を確認した。工藤研究員は、そういった場では「社会に参与する芸術」という新しい価値が生じていることを検証し、自らが主宰している NPO で大規模な展覧会「ソーシャリー。エンゲイジドアート展 社会を動かすアートの新潮流」を開くことで、広く啓蒙に務めた。この傾向を神野研究員は、社会の芸術フォーラムの運営を通じて、『社会の芸術／芸術という社会』（フィルムアート社）を出版し、現在進行形の問題として、研究者のみならず広く市民と一緒に考察する場を構築した。

研究年を一年延長した 2017 年度においては、前年度に引き続き、研究調査によって、全国の地域を舞台とするアートプロジェクト、あるいは地域アートの現状を確認した。所長の椎原は、研究調査に基づき、地域アートやアートプロジェクトの、現代美術史的な位置づけを明確にした。また、それらが新しい芸術の価値観に基づいていることに注目し、「関係性の美学」の公開レクチャーを開催したが、それによりアートとコミュニケーションに関する問題について、基礎的研究は遂行出来たと見えよう。

ただし、本研究の目的の一つであった「映画や音楽、文学といった創造的な分野」に関しての研究は進まず、美術の分野に限定されていた。また「渋谷校地近隣の文化施設との協働作業により、ワークショップ形式で検証作業」については、渋谷区立松濤美術館との協議を重ねたが、結局実現できず今後の課題として残った。2014 年度のシンポジウム「文化芸術振興における大学の役割」で取り上げた、本学の「日野プロジェクト」にも言えるが、地域との連携をするためには、担当する研究者の人的負担が大きく、それを本研究内で実現することは困難であった。

様式 15-1

2015 年度に行った「対話型鑑賞ファシリテーター養成講座」は、達成度の高い事業であったが、担当研究員の拘束時間が長く、事業を継続するためには他のスキームが必要であると思わざるを得なかった。ただし、2020 年のオリンピック・パラリンピックに向けて、様々な事業を構想するなかで、対話型鑑賞ファシリテーター養成講座や西川千春氏が行ったボランティア講座などは、学生に対して有意義であることは確かであり、別の機会での継続を視野に入れたい。

【決算報告】

年度（西暦）	補助金額（円）	執行金額（円）
2014	1,000,000	999,678
2015	1,000,000	999,190
2016	1,000,000	1,000,000
2017	1,000,000	999,991
合 計	4,000,000	3,998,859

※年度ごとの決算は別途報告済み。

※補助金は次年度への繰越が認められているため、執行金額が補助金額を超える場合がある。